



若林 森 奮

Isamu Wakabayashi: Outskirts of a Forest

自分の部屋の中に森をつくることを考えていた。
 ……どこか一ヶ所に立つて自分の把握する空間、言いかえれば自分が所有できる空間の内部と、その大きさを知り、その範囲を示す境界をどのように決定していくかに多くの注意を向けていた。
 現実的に植物や土などに関連しながらの作業でなくとも、
 以前から私は自分が自然の一部であることを確実に知りたいと考えていた。
 その確認のために様々なものを観察し、彫刻や絵をつくることが必要であった。〔後略〕
 1986年3月 若林奮



休館：水曜日 開館時間：11:00-19:00 土・日曜日・祝日は10:00-17:00 会場：美術館展示室2、4、5 アトリウム・1 入館料：無料

主催：武蔵野美術大学 美術館 図書館 〒187-8505 東京都小平市小川町1-736 TEL: 042-342-6003 | <https://maumi.musabi.ac.jp/museum/>

2023年6月1日(木)―8月13日(日) 武蔵野美術大学 美術館・図書館

特別協力 WAKABAYASHI STUDIO
 監修 梶田京太郎 武蔵野美術大学 造形学部油絵学科教授
 伊藤誠 武蔵野美術大学 造形学部彫刻学科教授
 戸田裕介 武蔵野美術大学 共通基盤研究センター教授

- 1 左から「《振動尺Ⅰ》鉄/20.5×34.7×149.5cm」「《振動尺Ⅱ》鉄、木、グアッシュ/34.6×54.6×163.5cm」「《振動尺Ⅲ》鉄、木、グアッシュ/19.7×28.8×181.6cm」「《振動尺Ⅳ》鉄/18.8×19.7×186.2cm」すべて1979年/すべてDIC 川村記念美術館所蔵
- 2 《所有・雰囲気・振動——森のはずれ》1981–84年/鉄、鉛、紙、木/257.0×414.8×506.3cm(部屋状部分サイズ)/武蔵野美術大学 美術館・図書館所蔵/インスタレーション(5th)「ISAMU WAKABAYASHI sculptures and drawings」ソウル・アーツ・センター(1991年/撮影:山本紉)
- 3 《The First White Core I》1992年/木、硫黄、銅、石膏/125.5×70.5×78.0cm/WAKABAYASHI STUDIO 所蔵/撮影:山本紉/画像提供:イケダギャラリー
- 4 《Sulphur Drawing No. 29》1992年/硫黄、アクリル、紙/74.5×70.0×1.0cm/WAKABAYASHI STUDIO 所蔵/撮影:山本紉
- 5 「若林奮 彫刻展 DAISY」(アキイケダギャラリー、田浦、1993年)展示風景/撮影:山本紉/画像提供:イケダギャラリー
- 6 《Daisy I-I》1993年/鉄、ベンガラ/153.5×66.0×65.0cm/WAKABAYASHI STUDIO 所蔵/撮影:山本紉/画像提供:イケダギャラリー

表面引用文:若林奮「森のはずれで 所有・雰囲気・振動」『へるめす』第7号1986年6月、岩波書店、p.72

[関連イベント]

- 《所有・雰囲気・振動——森のはずれ》部屋状部分内部の特別公開を予定しています。
[日時限定/定員あり]
- 若林が本学に勤めた1970年代から80年代、Daisyを制作した90年代を振り返りながら、若林奮を考えるトークイベントの開催を予定しています。
- 日時や内容など詳細が決まり次第、当館webサイトにてお知らせいたします。

「武蔵野美術大学 美術館・図書館」

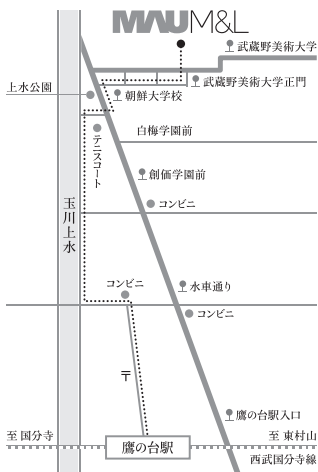
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
tel: 042-342-6003
<https://mauml.musabi.ac.jp/museum/>

同時開催展覧会

「MAU M&Lコレクション: 絵画のアベセデール」
6月1日[木]–7月2日[日]
「三浦明範——vanitas vanitatum」
7月15日[土]–8月13日[日]

交通アクセス

- 西武国分寺線「鷹の台」駅下車、徒歩18分●JR中央線「国分寺」駅北口4番停留所より西武バス「武蔵野美術大学」行、または「小平営業所」行に乗り、「武蔵野美術大学正門」停留所下車(バス所要時間:約25分)●JR中央線「立川」駅北口5番停留所より立川バス「武蔵野美術大学」行に乗り、「武蔵野美術大学」停留所下車(バス所要時間:約25分)
- お車でのご来場はお控えください。



若林は武蔵野美術大学在任時の1981年、学内にある工房内に鉄板をたて、自分自身のために10畳ほどの空間を作ります。その後若林はこの通称「鉄の部屋」の周囲を鉛で覆い、周辺に植物や大気を表す鉛の板やキューブを配置して《所有・雰囲気・振動——森のはずれ》

自身と周縁世界との関わりをめぐる思索を内包した作品により戦後日本の彫刻を牽引し、現代美術において大きな足跡を残した若林奮(1936–2003)。一見すると寡黙で非情緒的とも思われる形態は、自然や空間、時間、距離、表面、境界など、私たちを取り巻く普遍的で形を持たない事象を豊かに内包し、没後20年となる今なお、私たちが考え、向き合うべき多くを語りかけてくれます。

(1993年)は、人の背丈ほどある角柱に、植物そのものの構造を想像させる彫刻です。ともに自然や風景を具体的な対象とした《所有・雰囲気・振動——森のはずれ》と《Daisy》全10点を、当館のひと続きの空間で相対させることにより、その活動中期から後期にかけて色濃く表れる、若林彫刻の核といえる「自然」をめぐる諸相を読み解くこと

(1981–84年)として発表しました。自分自身が所有できる空間を区切ることで生まれた境界や領域をめぐる、自身を軸とした周縁への思索を一層深めた本作は、若林自らを含んだ自然や風景そのものの具現化を試みた作品といえるかもしれません。若林が彫刻観を拡張させるきっかけとなった極めて重要な本作を、本展では約30年ぶりに展示します。また、おなじく自然の精緻な観察をとおして生まれた《Daisy I》

「自分が自然の一部であることを確実に知りたいたと考えていた」という若林が、世界をどのように知覚し、そこで見出した概念をいかに彫刻化したのか。若林が「森のはずれ」に思索を重ねたここ武蔵野の地で、若林彫刻の意義を再考します。

を試みます。さらにこの2作品再考の糸口となる彫刻として、自身と対象との距離を計るものさしとして70年代以降通底する概念となる《振動尺》(1979年)、80年代終わりから若林にとって重要な素材のひとつとなる硫黄を用いた《The First White Core》(1992年)などのほか、若林の夥しい思索の一端が見えるドローイングや小品、資料約100点を展示します。